

最も刺激的な戦争論だ

『ぼくらの戦争なんだぜ』（高橋源一郎）

三上治 10月29日

The image shows the book cover and promotional text for 'ぼくらの戦争なんだぜ' (Our War is What It Is) by Takahashi Genichiro. The cover features the title in large white characters on a black background. Below the title, there are three recommendation quotes from other authors: Ueno Chikako, Kato Yang, and Tomomasa Fuchino. The author's name, Takahashi Genichiro, is prominently displayed in red and white. A small portrait of the author is also included. The publisher's name, Morning News, is visible in the bottom right corner of the cover.

ぼくらの戦争なんだぜ

高橋源一郎

戦場なんか知らなくても、ぼくたちはほんとうの「戦争」にふれられる。そう思って、この本を書いた。

上野千鶴子氏 (東京大学名誉教授、社会学)

加藤 陽子氏 (東京大学教授、日本近現代史)

達坂 冬馬氏 (第19回本屋大賞「同志少女よ、敵を撃て」著者)

推薦!

戦争を語る「小さな声」を追いかけ、タカハシさんは遠い国の「彼らの戦争」を「ぼくらの戦争」に変えてしまう。こわい本だ。

上野千鶴子氏 (東京大学名誉教授、社会学)

思想ではなく感覚で「日常」を感受せよ。もう始まっているかも知れない「戦争」への手立てを著者は渾身のことはで説いた。

加藤陽子氏 (東京大学教授、日本近現代史)

教科書から市井の人に至るまで、日本語はいかに「戦争」を語る言葉を生み出したのか。本書を読みそれを知ること、その裏にある「平和を希求する言葉」に耳を澄ませたい。

達坂冬馬氏 (第19回本屋大賞「同志少女よ、敵を撃て」著者)

高橋源一郎

戦場なんか知らなくても、ぼくたちはほんとうの「戦争」にふれられる。そう思って、この本を書いた。

朝日新書

(1)

あれはいつ頃のことだったのだろう。僕は父親になぜ、僕の奔放な行動というか、活動を咎めなかったのかと聞いたことがある。大学生になるころ父親は僕に左翼（アカ）だけにはならないでくれ、と言った。僕はそれに背き安保闘争を皮切りに革命運動に加わり、退学や逮捕劇のようなことを繰り返していた。離婚のことも加わって父親には最悪の所業を繰り返しているように見えたと思う。一時は勘当まがいのこともあったが、父親は僕の行動を咎めなかった。拘置所や刑務所にも差し入れに来てくれた。実刑で下獄していたときも、何度か面会に来てくれた。そんなこともあり、僕は父親にそんなことを聞いたのだった。父親は「お前の自由を奪いたくなかったからだ」と言って、自分が若いころ、ハリウッドに行ってカメラマンになることを祖父に止められたことを話し出した。若いころ祖父も父親もカナダにいたのだが、父親は友人に誘われてハリウッドに行きたかったらしいが、祖父に止められた。祖父（父親）の意見は絶対的だったからという。父親がカメラマンになりたかったという話は何度か聞いたことがあるが、それが僕の行動を咎めなかったこととが関係していたことを聞いたのは始めてだった。この話はグサリと胸を来たが、父親への畏敬の念を持たせた。と同時にこれが「父親の戦争（戦争の反省）」だったのだと思った。父親とは戦争についてそれほど話したことはなかったのだけれど、これで分かっ

たと思った。戦争のことを考えるたびに、そして父親のことを考えるたびにいつも思い出すが、僕のこころの深くにあることだ。



ロシアのウクライナ侵攻は衝撃的な事件だった。それは一言でいえば、戦争が現実的で身近なものだということと迫ったことである。僕らはこころのどこかに日本も含めて大国が主体となって演じる戦争はないだろうと思ってきた。核の抑止力も含めて平和の不可避性というか、

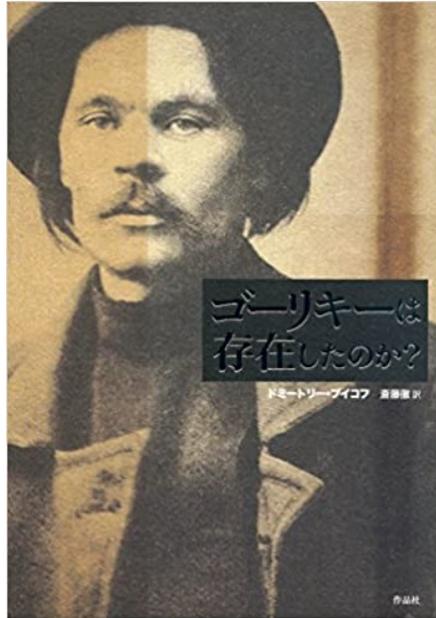
そういうことが意識の片隅にはあったのだ。僕らはかつてベトナム戦争を身近に感じ、僕はアメリカと闘う側（ベトナム）の義勇兵に参加したいと思ったこともある。けれども、まだ、どこかでこの戦争は他国（他者）の戦争だという思いも残っていた。今度のロシアのウクライナ侵攻は古典的な戦争（古典的な帝国主義の侵略戦争）というべきものだが、この他国の戦争（他者の戦争）ということではないことを感じさせた、もちろん、僕にはこの戦争は他者の戦争だという意識もある。だから、このロシアのウクライナ侵略は奇妙な意識をもたらしているものだと言える。戦後の平和の不可避性をやぶり、戦争の不可避性を到来させるのではないかということと、やはり平和の不可避性という枠は残るのではないかということだ。この意識は戦争が他者の戦争という意識ともう自己の戦争だという意識の奇妙な混在状態にあることを意味する。この意識に分け入るから形でのウクライナ戦争についての論評は何処にもないといえる。『ぼくらの戦争なんだぜ』はそこに踏み込んだものであり、今、手にしえる最も刺激的な戦争論だと言える。

(2)

ロシアのウクライナ侵攻はかつてなかったような衝撃を僕らにもたらした。その衝撃とは戦争が現実的で身近なものだということである。しかし、他方で戦争が依然として遠い世界の出来事だという思いを残していることも事実だ。この遠さに空間的な距離の問題があることは確かだ。しかし、ここにもう一つ、僕らにとって戦争には時間的には遠さということが存在している。この遠さというのは時間的な断絶と言っていい。単純に言えば戦争が繰り返し眼前にあった1945年（昭和初期までとその後の戦後において戦争の意識が断絶した意識としてあることに他ならない。この本の中で著者は繰り返し、父親たち（ということは昭和初期まで戦争を身近な出来事として生きた人々）から戦争体験の話聞いた、と述べている。それはどこか退屈で言うなら「他者の戦争」という感想を免れなかったとも述べている。

戦後に自己意識を形成した戦後世代にとって戦争は追体験の世界であり、そこを通してしか関係できなかつたこととしてある。これは善悪を超えた問題である。自己に迫りくるような戦争が戦後世界の中では存在せずであり、現実にかかる戦争は地域戦争という枠組みにあると思ってきたのだ。自己に迫りくるような世界戦争は抑止する枠組みがあるとい

う意識が強かったのである。これは時間的な戦争の断絶ということと深く関連してあったのだが、この壁を破るような契機がロシアのウクライナ侵攻にはある。ただ、先に述べたように、これは一方では世界戦争に発展して行くことを抑止していく枠組みもあるという意識もまだ残している。だが、戦争は他者の戦争だという意識を残しながら、自己の戦争ということに迫りはじめたという意識の変化を経験している。それが現在である。



著者はこのところを踏まえながら、時間的（歴史的）な断絶状態にある戦争の世界に踏み込む。この著作はウクライナ戦争に直面したロシアの作家（ドミトリー・ビコフ）がウクライナ文学を読めと言ったことに触発されて、日本の戦時下の作品を読み、それが未来（現在）

の戦争を提示していることを語る。戦時下の作家たちがその作品によって、戦争にどう反応したかを示す。それによって、遠いウクライナ戦争は身近な戦争であることを示す。これは未来のために、歴史（過去）を追跡するというよりは、未来の視線が過去を甦らせようとしていることである。理念的にはともかく、感覚的には戦争が空白としてあり、あるいは感覚的には隙間があるのを想像力で埋めようとすることである。現実の空白に対する未来からの働きかけともいえるだろう。現実の空白が行動によって開かれるのと似た営みともいえる。ここで著者がとっているのは政治的言説ではなく文学者の戦争についての言説を追うという方法である。彼の言葉で言えば大きい言葉での戦争ではなく、小さな言葉での戦争の言及だが、この試みは成功していると言える。



(3)

戦争って何だろう。今回のロシアのウクライナ戦争についての認識でも生じた問いだ。誰の目にも明瞭なのはこの戦争はロシアの帝國的な侵略戦争である。でもなぜ、今、ロシアがこの戦争を始めたのかは明瞭

ではなかった。国連憲章などの戦争についての世界的枠組み、法的枠組みを破る行為を何故、今、ロシア（プーチン）ははじめたのか、明瞭にはできないところがある。戦争は国家意思を強力（暴力）で持って押しとうそうとする行為であり、国家権力の欲動というこ

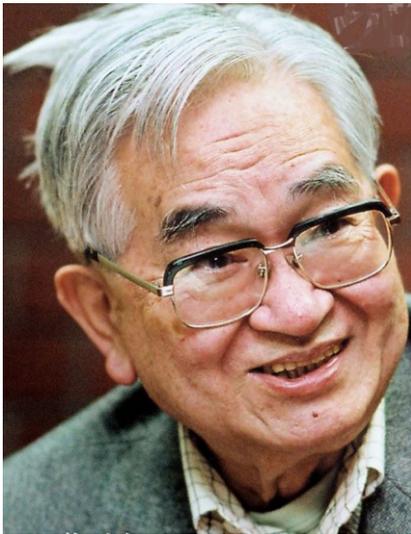
とになるが、ロシア国家（プーチン）にとってこれがどうして必然なのかの説明がもう一つ納得しえるものがなかったのだ。納得するということは認めるということではないが理由としてわかるということだ。戦争が国家意思の発動であるとすれば、その意思の発動の理由を国家は大義などの形で表す。が、ロシアの場合にはこの大義が明瞭ではないのだ。例えばナチズムの排除、あるいはナチ化の阻止などというが、ウクライナのナチ化ということがピンとこないというか、説明になっていないのだ。これらは総じていえば国家意思とその発動を認識し、把握することの難しさである。これはロシアのウクライナ侵攻を通じ、現在の戦争の認識や把握が難しいこと、そこでは大きな言葉での戦争の分析や認識という課題がある。

著者はこういう大きな言葉での戦争の認識の問題をロシアのウクライナ戦争が突き出した課題として十二分にわかっているのだと思う。だが、著者はそれよりは違う方法での戦争へ接近せんとする。戦争は国家意思の発動であるが、それはその発動に反応する人々の動きである。人々のこの国会意思への反応を構成的に組み込んで戦争は成り立つのである。反応ということは同意による参加から、それへの反抗ということを含めて多様なものであるが、それが戦争を構成するのであり、現実的に生成させるのだ。この人々の反応としての戦争ということは、戦争体験やその証言として語られてきたのであるが、その多くは沈黙としてあり、文学作品などとして残されている。著者は親から多くの戦争の体験を聞いている。僕の経験からみればそれは大変豊富なものだったと思えるが、そこで特徴的なことは著者がその体験談の多くを退屈なものと感じたということであり、どこか他者の戦争という感じをも持ったということだ。僕らは戦争体験を親や親たちの世代の人たちから聞いて育ったし、そのようにして戦争を追体験した。著者がその体験談にどこか退屈さを感じたというのは、これは他者の戦争の話であって、自己の戦争の話ではないと意識を持ったということだろう。これは距離の問題もあったが、そこには隙間があったということである。感覚的には関係ないという意識があることだ。

戦争は国家意思の発動なのであるから、それは国家の物語として継続されていく側面を持つものだ、この国家の戦争の物語は歴史的な物語の根幹をなすものでもあるが、戦後は良くも悪くも史的な断絶を余儀なくされた。この問題は敗戦を契機にする戦争放棄を掲げた問題である。国家と戦争の物語の敗戦を契機とする大きな転換は明治以降の国家と戦争の物語の断絶をしたのであり、それは現在も続いている。大きな言葉、つまり政治の言葉でいえば、ここから日本は非戦を根底に持つ国家と戦争の物語を創り出す課題に逢着した。この物語は体制にある人だけではなく、反戦争や反国家（反体制）の人に課せられた課題でもあった。権力にあるものだけではなく、反権力にある側でも、国家物語なのかに戦争を前提としたものではなく、非戦を課題としてことを要求したのだ。例えば社会主義者の国家物語に変化を要求したのだ。この課題は果たし得たのか、失敗を重ねてきたのか、ここで問わないが、著者はこのことを十二分にわかった上で、小さな言葉での戦争のことに言及している。僕そこは読み取っておくべきことだと思う。

(4)

戦争とは先に述べたように「国家意思の発動で権力の欲動」である。現在の戦争は国家（支配共同体）を軸にした国家構成の主体部分だけの意思の発動で形成できない。その欲動だけで戦争はできない。そういう戦争は見かけの強さに比してもろいものであると思う。現在の戦争は国民（市民や地域住民）の意思や欲動を組み込むか、その点での合意を不可欠とする。国家が何らかの形での国民的意思形成に関わらない国家は国家として機能しないし、戦争もまたそうであると言える。国家意思が国民に降りてきくる形での国家意思の形成に対する様々の反応が戦争の現象形態であるが、著者はまず、教育という現場に降りてきた問題を取り上げる。



鶴見俊輔の戦前の教科書を読みながら論評をとりあげながらである。鶴見俊輔は小さな領域での国民の合意なり同意のないところで戦争は成り立たないという考えに立ち、この領域で国民の反応を考えてきた。それは戦前の問題ではなく、戦後のことでもあった。戦後の国民は戦争に同意しない考えを構築できたか、どうかを問うてきた思想家だった。

彼は戦前の日本では戦争を拒否した市民や地域住民はいなかったということを最も深く考えてきたのである。同じようなことを吉本隆明は日本では戦争への動きから孤立することは難しいと述べていた。共同体、あるいは共同の動きから孤立することの難しさである。鶴見は最も根源的に戦争についての考察と対応の提言をした人だが、教科書を通して戦前にもあった大正―昭和初期（大正末から末から昭和はじめ 1920 年代から 30 年代の前半）と昭和 10 年代（1930 年代の後半と 1940 年代後半）の違い、戦争の浸透度違いを取り出している。ここの分析はなかなか見事だ。

国家がその国家意思を国民に伝えるメッセージとは「国と国が争うことが、いかんともしがたい現実であり、だからこの争いにあっては、理非を超えて自分の国のためにたたかうほかないという考え方である」であるが、このメッセージを教科書を通して浸透させたのだ。昭和の初めにはそれでもこのメッセージに反対するグループはいたと鶴見はいう。大正デモクラシーの影響もあったろうし、昭和の初めに全盛期を迎えていた左翼運動の余韻もまだあったのかもしれない。これは昭和の 10 年代になると国家意思を押し付けてくる動きは強まり、このメッセージの刷り込みは激しくなっていく。

僕は、大正デモクラシーから昭和の初めに全盛期であった左翼の反戦を色濃く持つ政治的抵抗運動が、なぜ、弾圧と抵抗の中で消えて行ったのかに関心がある。これは権力による弾圧が主要因ではなく政治的言葉の内容が大衆的な孤立を招くものであったという考えに立ってのことである。俗にいう反権力にあった側が転向から戦争協力へと行って行った要

因を政治的言葉（大きな言葉）での戦争論ということになる。この辺では鶴見や著者は大衆というか、国民の意思のありかたにより注目するところがあり、小さな言葉にささえられない、それを裾野として持たない、政治的抵抗の弱さをみている。そういう考えが強い。その点では僕も同意するのだが、同時に、この時代の大きな言葉での戦争への抵抗がどうなったか、それが小さな言葉での抵抗の行方にどう関係したかの関心はある。



昭和 10 年前後に国家の戦争への動きは加速的に強まりはじめる。「天皇の統治」（国体）の強調や軍の政治的進出の動きも活発になり、やがて日中戦争も勃発する。この時代は戦争が社会に降りてきて、市民や地域住民にもその反応や対応がせまられることになる。これはある意味で政治的世界での戦争では他者の戦争だったのが、個々の生活者（大衆）のレベルの戦争になったことを意味する。戦前の人の多くの証言ではこの時点で戦争は身近なものとなり、その時は、内心で戦争に反対する気持ちがあってももはやどうすることもできないところに追い詰められていたといわれる。木々康子『敗戦まで』はそういう証言の一つである。

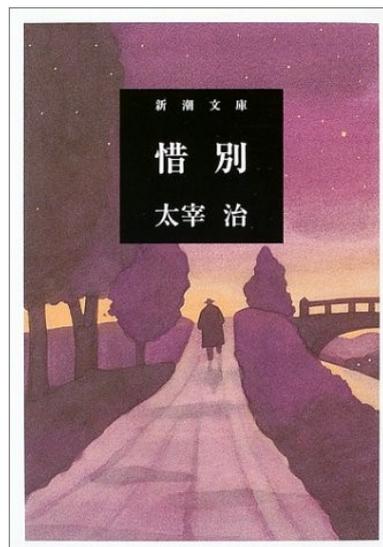
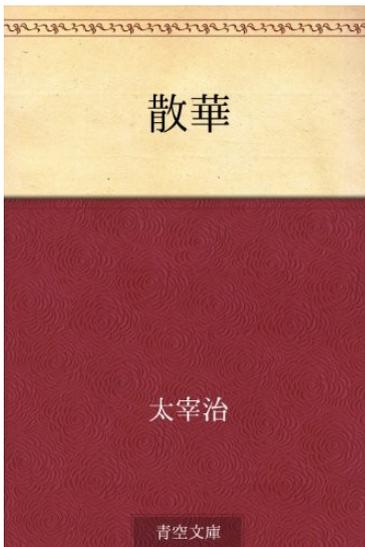
(5)

文学者たちも国家が押し付けてくる戦争の反応（対応）を迫られることになる。文学者たちは兵士として軍に加わるものもあれば、従軍作家のように戦争に協力するものもあれば、文学報国会のような団体に参加するものもある。それを拒否する者もいた。一番重要なことは書くことに制限が出てことであり、書く環境が変わったということであった。このことは文学者たちにとって戦争が身近な、いうなら戦争が自己の戦争になったことである。著者はこの戦時下の文学者たち作品を通して戦争とはなにか、戦争への抵抗は何か析出するのだが、ここでは戦後に行われた戦争への協力者とか拒否者とかの区分（多分にイデオロギ一的、政治的な区分）ではなく、戦争への反応や対応を作品の中にみるということをしている。ここは納得のいくものである。



例えば、林芙美子が従軍して書いた『戦線』を取り上げている。この作品は戦前のベストセラーであったが、戦後は典型的な戦争協力作品として葬られ、作者の自己の作品集からも削除していたものだ。最近になって復刊している。作品は大陸で戦争を展開する兵士たちに感動し、その共感を綴ったものだ。それは大衆作家としての根を持つ林芙美子が戦争に前のめりになった日本の大衆に同調するものであるという一面がある。自己も戦争にのめりこんでいくところのある作品だ。同時にこの作品には押し付けられた戦争に関係のない大衆の発見とそこへの

同調もある。直接には中国人老婆や婦人への目線の中に戦争を賛美する自己のこころを荒んでいるという見る目を見出していることである。戦争への同調の揺らぎであり、そこにはたたずんでいる作者がいる。ここを著者は国家的な枠づけられた「大衆」をこえて大衆と連帯する目の発見でもあったと評している。それは国家に枠づけられ分断された大衆が、国家の押し付ける戦争など関係がないとする大衆と連帯していく契機の発見ではなかったかという。これは文学者にとって戦争とは何であったかを示唆している。人は戦争という避けがたい契機の中で生きながら、戦争に協力に従わせながら、戦争を超えたものを発見することもできる。それは小さな言葉として表現するか、なお沈黙のうちにあるほかないかは別にしてそれができる。



これはこの本の中心とでもいえる太宰治の二つの作品の分析と評としてもあるものだ。『散華』も『惜別』も国家の要請に応じて戦争に協力した作品といわれもするが、その作品の中で戦争を超えるもの、あるいは抵抗を読み取る。戦争は国家が押し付けてくるものである。それを跳ね返すという抵抗は難しい。本当に抵抗することは難しい。太宰は『惜別』の中で、魯迅の日本留学時

のことを扱いながら魯迅（中国の文学）を読むことを進めている。これは先に取り上げたブニコフのウクライナ文学を読めというのと通じる。鶴見俊輔いうように日本人で本当に戦争に抵抗する人は出てくるのだろうかという自問は繰り返すしかないものだ。ここには侵略に対して武器を持った抵抗も含まれる。日本人はそういう場面で闘うのかということである。国家を守るということが自然であった時代ではないところに戦後はあったし、それは紛れもなくよきことだった。国家を超えるということであり、戦争に抵抗することにはそれが含まれる。

著者はそのキーワードとして日常ということを示唆している。ここは大変に興味深いし、小さい言葉とともに示唆されることの多いものだ。僕なら自由ということを示唆したいところだが、それは大きな言葉としての自由ではなく、小さい言葉での自由である。かつて恣意的自由の擁護ということ提起したことを想起するが、大きな言葉の自由は小さな言葉の自由を支えられなければ存在できない。